研究ノート Research note

沈まなかったお地蔵様～女性たちが守り伝えた海難の歴史～

The Jizo statue that didn't sink
－ A History of Maritime Disasters Protected and Passed Down by Women －

佐藤　雄生 *
Yuuki SATO*
＊：松前教育委員会事務局
＊：Matsumae Town Board of Education Secretariat

キーワード　延命地蔵・館浜・口伝
Keywords　Enmei Jizo, Tatehama, Oral history

Abstract

An Enmei Jizo statue is enshrined in the Tatehama district of Matsumae Town, and stories about it have been passed down by local women. However, due to the declining birthrate and aging population, fewer people are becoming involved with Enmei Jizo. The author has collected stories related to Enmei Jizo and discovered that they coincide with events related to maritime accidents recorded in ancient documents. It will be important in the future to create opportunities for people of all ages to learn about history, for example by filming these stories.

はじめに

北海道島の最南端、松前町。その中心である福山市街地から折戸浜沿いの国道 228 号を北へ約６km 走ると、館浜という人口 250 人ほどの集落にさしかかる（図１）。寛永 21（1643）年に成立した『新羅之記録』[1] によると、館浜には祢保田館という中世城館があったとされ、館主は近藤四郎右衛門季常であったという。館跡は見つかっておらず中世遺物も確認されていないが、記録上は中世から和人が拠点を構えていた地区ということになろう。

近世、松前藩の統治下にあっては、祢保田村あるいは根部田村といった表記でその名が見られ、西在（上在）の村では松前城下に最も近い位置にあった。松前町郷土資料館の所蔵になる『村鑑下組帳』によると文化６（1809）年時点の根部田村は戸数９軒、人口 34 人、計７艘の漁船と 31 匹の馬がいた。ニシン獲りの出稼ぎに行ったのは２軒のみで、主たる産業は馬追や炭･薪の駄送り、女性は春のノリ摘み､夏の昆布獲りなどであった。

大正 12（1923）年に至って根部田村･札前村･赤神村・雨垂石村・茂草村の五つの集落からなる小島村となり、昭和 15（1940）年の地番改定で根部田村の字名は館浜となった。これは祢保田館があった、つまり「館」があったという記録に由来するものだろう。

昭和 29（1954）年の松前町･大島村･小島村･大沢村の一町三村合併を経て、松前町字館浜として現在に至る [2]。集落の生業は漁業が中心であり、風況が良好であることから近年では大小の風力発電施設が林立するようになった。

さて、館浜の国道沿いには、小さく「地蔵堂」という看板を掲げた平屋建物（図２）があり、内部には一体の地蔵が祀られている。本稿では、このお地蔵様が館浜にたどり着いた海難のストーリーと、地域住民との関わりを紹介する。

図１：松前町字館浜の集落と折戸浜（電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成）

地蔵の由来

この地蔵は総高 126cm、瀬戸内産と思しき花崗岩で作られている。右手に錫杖、左手に薬壺を持った立ち姿、地元では健康長寿のご利益がある延命地蔵として信仰されている（図 3、4、5）。

地蔵の由来については地元の人々により口伝されてきたが、地蔵をお祀りしていた方々のひとりであった佐藤アキ氏（大正 13 年生まれ、現在は故人）によって平成 18（2006）年に記録が残された。その内容は概ね次のとおりである。

『今を遡ること 140 年もむかし、本州より小樽の方の鰊場まで資材を運ぶ北前船が、大時化のため館浜沖のヨシ島付近で遭難した。人はヨシ島へあがり助かったが、船はすっかり壊れて浜に打寄せられた。これを漁師が片付けたところ、藻屑の中に石の地蔵様があったので婆さん方が浜辺で仮供養した。その際、このお地蔵様を町内で祀ることが出来ないだろうかと発言があり、相談の上で遭難した船の船主に譲ってもらえないかとお願いした。船主が言うには、「あの沖からよく海中へ投げ出されずに浜へ着いたものだ。よほどこの地にあがりたかったのだろう。差し上げるから大事に祀ってください」と快諾してくれた。その後、地蔵堂を建てて以来、今日に至るまで、代々館浜町内の心の拠り所として婆さん方が供養してきた』。

図２：館浜の地蔵堂

口伝と史実の合致

平成 18 年当時から逆算すると、140 年前というのは慶應２（1866）年にあたる。筆者が聞き取りを行ったところ、地蔵が浜に揚がったのは元治元（1864）年という説も伝わっていたが、いずれにせよ幕末に起きた事件のようだ。松前城下と近在の村々は、前浜が岩礁地帯であったり水深が浅いなど、港としての条件は良いとは言えず、近世には破船・沈船の記録が多い[3),4)]。そこで館浜、つまり旧根部田村周辺での災害記録を調べたところ興味深い記事を確認することができた。

松前城下の有力商人・三代目林長左衛門が、町年寄（町奉行のもとで町方の政務にあたる役人）として勤務する日々の出来事を記した『番日記』[5)]、その慶應２年２月３日の項には次のようにある。

「一昨二日　合下モ風よふ蝦夷地行船々并向地ヨリ渡り船々有之候処　段々烈風相成　其夜タバ風　ヲリト并根部田村領おゐて破船数艘　溺人も数多有之・・・(後略)」。

つまり、慶應２年２月２日はアイシモ風（北北東の風）だったが、夜にはタバ風（北北西の風）となり、蝦夷地を往来する船舶や本州からの渡海船が折戸浜及び根部田村の沖合で破船し、多数の溺死者が出たというのだ。新暦にすると３月中旬、ちょうど春一番に物資を積んで蝦夷地へ入ってくる氷割船の一団だったのかもしれない。

いずれにせよ、口伝にある「北前船がヨシ島付近で遭難した」というストーリーは、この海難事故を指しているとみて相違ない。

地蔵は瀬戸内方面で作られ、日本海航路を経由して小樽の方の鰊場、おそらくは積丹半島周辺の集落へ運ばれる途中だったのだろう、しかし根部田村の沖でシケに遭い、浜辺に打ち揚げられた。積み荷として地蔵を運んでいた船主からの譲渡を経て、延命地蔵として根部田村に落ち着くことになったわけである。

図３：館浜の延命地蔵

図４：持物である錫杖（左）と薬壺（右）

図５：化粧を施されたお顔

延命地蔵の御利益

地蔵堂は館浜にお住いの６名の女性が守っている。彼女たちの話によると、延命地蔵の性別は女性だという。地蔵に性別があるなしの議論は置くとして、彼女たちの手によって唇には紅がさされ、目にも墨が入れられたことでふっくらと親しみやすいお顔に見える。「講」というほどではないが、現在でも春彼岸・秋彼岸・お盆に集まりがあるという。

かつて娯楽が限られていた時分にはみんなで地蔵堂に集まり、延命地蔵を拝んでいたそうだ。延命地蔵のその日の顔立ちを見て、今日は顔色が悪いからシモの方（館浜から松前城下方面）に気をつけなさいとか、体のどこが濡れているからどうだとか・・・ある種の占いのようなことも行われていたという証言もあった。子供の寿命を延ばすという延命地蔵としての信仰だけではなく、顔などの印象をもとにした行動指針のような役割も担っていたのだろう。

おわりに

延命地蔵の由来を記した掛軸（図６）の末尾には、佐藤アキ氏の想いが次のように綴られている。「今まで延命地蔵をお祀りしてきた女性たちには悩みがあった。それは口伝を文字に起こし、責任をもって代々お世話をすることを後世に伝えたいというものだ。30 歳ころから地蔵堂の集まりに参加するようになった私もそのことが頭から離れなかったが、平成 18 年に至ってようやく実現できて安心した」。口伝の文字化により情報を永続的に伝えられるようになった、その晴れやかな気持ちがうかがえる。

海難事故の史実に端を発する延命地蔵のストーリーは、浜どころである根部田（館浜）の女性たちが語り継いできた貴重な「海の民話」である。松前町は全国的な例に漏れず少子高齢化に苦しんでいる。地蔵堂に集まっているのは概ね 60 代以上の女性が中心だが、次世代への継承が課題でとなっている。

幕末以来の口伝は、140 年後の平成に至って

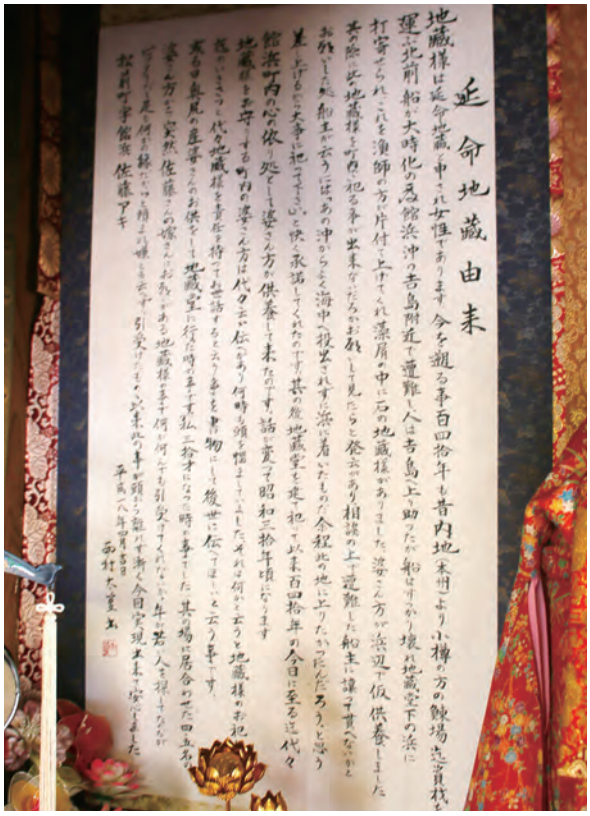

図６：延命地蔵の由来を記した掛け軸

文字化された。令和の時代にあっては映像化などにより幅広い世代に対して地域の歴史に触れる機会を創出し、することが肝要ではなかろうか。

松前の歴史は城と城下町のみにあらず。近在の村にも興味惹かれる歴史が眠っているものである。

文献

1）Hokkaido Prefectural Government: Newly Selected History of Hokkaido, Volume 5, Materials 1, 1936（in Japanese）新撰北海道史 第五巻史料

2）Matsumae Town: Matsumae Town History, Chronology, 1997（in Japanese）松前町史 年表

3）Matsumae Town: Matsumae Town History, General Theory, Volume 1, Part 1, 1984（in Japanese）松前町史 通説編 第一巻上

4）Matsumae Town: Matsumae Town History, General Theory, Volume 1, Part 2, 1988（in Japanese）松前町史 通説編 第一巻下

5）Matsumae Town: Matsumae Town History, Historical Materials, Volume 2, 1977（in Japanese）松前町史 史料編 第二巻